

教育者の樂

樂 天 子

ある家に菊作る翁あり、昨日今日種類分けたる苗を庭園に移し植うるに余念なし、この翁嘗て教育に従事せし人なりければ、菊作る事を教育に比して曰く、世の教育家は常に他業に心を寄せず、余の菊作りと等しからんことを思は、始めて良教育家良教師たらんことを得んと云へり。宜なるかな、翁の菊作るを見るに、夏に近づくと頃更めて庭園に植付け、照る日のかげを覆ひ、夕毎に水うちそゝぎ、塵だにすゑじとふふし立て、蕾持つ頃に至れば、日に幾度となく見まはりて、枝花の望みなきは摘みとり、たゞ一とつ末の蕾に心をこめて、いと大きく咲き匂はするなり。その花盛り的美しさ、鶴の舞ひ昇るやうなるあり、龍の天くだるに似たるあり、鷹の爪のごとく曲れるもの、鶏のけづめのごとく鋭きもの、白に赤に黄に樺に、とりく皆美しく眺めなり。さればその近隣の

もの皆もてはやし、人々朝な夕なに、この翁の庭園に立よりて、しばしその目を養ふを常とせり、又程遠き都よりも聞き傳へて、わざ／＼見に来る人もあまたあり、時には禮のしるしにとて、黄金あまたとらする人もあれど、翁は、之をかたくいなみてうけとらず、却つて一首の詩歌をこのす人、より多く感謝しをるなり。あはれ、此の翁の心とその行ひの様、面白からずや、また、貴からずや、若しこの翁をして、黄金のために菊を作らしめ、黄金の多少によりて、喜びを異にするものならしめば、花の眺めもいかばかりか失せぬらん、あや錦の匂ひもいかばかりか薄らぐべし。さて茲に改めて世の教育者に事問はん、諸君はこの菊作りの翁の心を、おかしと見ざるか、貴しと思はざるか、慾を知らず金ほしからぬ愚人なりとて卑しむるか、更に一步を進めて言はん、菊の花をもて、彼のやさしさ美しき人の子と見なし、この翁をもて人を教育する諸君の事と假定せば如何。六歳にして、本月始めて學びの園生に入り立つ子等、今床がへしたる菊の苗に似ざるや、朝毎

に塵をばらひ、水うちそゝぐ事、諸君が日毎に鞭とりて彼等を教育したまふに何ぞ異ならん。あはれ諸君は、色香うるはしく咲きたる花を見て楽しみ、その樂を人々共にする翁に倣はんと欲せざるか。黄金の多少によりて喜びを異にせざる、黄金を得るを目的とせざる、翁の高潔なる精神を何とか思へるか。余輩は、彼の俸給の多寡によりて常に學校を轉ずる、一種輕薄なる教育者を排斥するものなり、況んや道ならぬ金錢を貪りて、之を自身の飾となす偽教育者に於てをや。

ざりとて、教育者として衣食の資なかるべからず、妻子をも養はざるべからず、時勢に後れざるため、常に教育書も購讀せざるべからず、されば全く無報酬にてとはいはず、また社會は教育者を優遇すべき義務をもてり、出來得る限りは有形無形に待遇を厚くすべきは人々の義務なり、教育者なるもの常に肥料たるべき教育書の研究を怠らず、己れの分に安んじ、高尚なる職務と、遠大なる希望とを全ふすることを樂しみて、彼の菊作る翁に倣はんことを切望す。菊作るわざは風流なり、風流は

利慾と共に兩立すべからず、されば、もし菊を作りて利を營まんとならば、俗の俗をつくして實に趣味なくして、おかしからん、彼の團子坂の菊人形何處に風流のおもひきある、さて教育と云ふ業はいかに、教育は神聖なり、高尚なり、また利慾と兩立するものにあらず、愚なるかな、神聖なる高尚なる教育を以て、自己が利慾を全ふする一種の營業と思へる偽教育者のありしとは、あゝ斯くの如き人のありしは、もはや過去に屬せしならんか、余輩は教育者は、終始その神聖高尚の維持者たる大任を負へることを忘れざるを切望して止まざるなり。

利慾を目的とせる菊作りは、決してまことの菊を作ることは能はざるなり、よし作りても其の庭園の入口には、風流ならぬ文字か、げられ、花の高潔なる價はために失はる、世の一部の輕薄なる教育者に告ぐ、諸君若し多く金を得んとならば、先づ其の神聖なる高尚なる教育界より脱して、他の銳利を事とする商工界の群に入るを要す、教育に従事しながら其の心常に利益に支配されつゝ、あるは

似て非なるものなり、わが教育界は、菊の花そのものを樂みとせる菊作りの如く、教育そのものを樂みとする教育者の手に育てられんことを望むものなり、わはれ風流なる菊作りは誰れ、神聖なる教育者は今幾人かある。

予の好める娯樂

(佐々木信綱)

よく勉めよく遊ぶといふ事は、最も望まじき事で、よい娯樂を求めてゐるが、最も好むといふ娯樂が無い、幼ない時母が謡曲を習ふので一所に習つたが、どうも性に合はぬので止めた、父が晩年老いのすまびに碁を打つたのを側で見おぼえて、碁の趣味を知つたが、専門の用に頭を悩ました後、また頭を悩ますのはと滅多に打つた事は無い、始終机に向つてゐるのであるから、戸外の運動をと思ふて、大弓は師に就き、テニスも弟子の人の家にグラウンドがあつたので暫く習ふたが、遂に中絶した、それに家の庭が狭いので、家でする事が出来ぬからであつた。若し娯樂といひ得べくんば、余が娯樂ば讀書と旅行とである、晝の間は自他の用に煩はされるが、物しめやかな夜、または朝疾く會心の書を讀む樂しさはまこと言はむ方なき樂しさである、春と秋によく旅行かする、夏は色彩の變化に乏しく暑くもあるので、春の末蓼が青く菜の花黄なる頃天長節の前夜、野も山も黄に紅に染め出づる頃が、最も旅行にふきはしいから、春秋に旅をする、讀書と旅行はいづれもわが専門の業に關して、益が多いのみならず、娯樂としてもよい娯樂であると思ふ、(新婦人)

紀念の牛塚

川口孫治郎



此由來を語るには、先づ牛の性格を略述する方が便利である。牛の性格を略述するには馬のそれと對照する方法によるがよく分つて且つ覺え易い。世に牛飲馬食といふ諺があるが、食べ方には牛馬共に作法の立つて居ないことは勿論だが、併し馬は必ずしも然ら大食をしない。彼の甘藷に棒を差したやうにイヤに肥つた馬や、臙元豆に針金を突張つたやうにイヤに瘡せられた馬などが暴食をするのは皆腸胃を傷めてから後のことであつて此等は例外である。之に反して牛は生來腸胃が丈夫に且つ大きく出来て居るから、盛に食ひ大に飲む。味よいものなら胃腸が破裂しても尙は食ふ。少し品格が上等でない。